

25年ぶりのセネガルへ

～25年間の時間の流れとは～

25年前にセネガル川添いのリシャートルの町で土壌調査、牧草栽培の試験調査に参加して以来、久しぶりにセネガルを訪問する機会を得た。セネガル川沿いのリシャートルは乾燥しており、降水も少ないため、セネガル川の水を利用した灌漑農業の調査に参加したのに対し、今回の調査地はカオラックである。

カオラックは、首都ダカールから南東へ車で約4時間にある。近くには塩水の Saloum 川が流れ、降水量も 700mm 程度あり、天水農業も可能となっている。トウモロコシや野菜の栽培も盛んであるが、カオラックは、セネガル内では落花生盆地と言われる落花生生産地帯の中に位置している。周辺には多くの落花生の畑が広がっている。落花生栽培は、セネガルの独立以前の旧宗主国時代からプランテーション栽培で行われてきており、セネガルのピーナッツオイル輸出量は世界の 3 割を占めており、国の一大産業となっている。カオラックにも大規模な搾油工場があり、工場の近郊には山のように積みあげられた落花生が見られる。また、落花生は非常に利用価値の高い作物で、もちろん子実は食用・搾油用に、また殻は発電や土壌改良材としても使われている。さらに、残渣(植物体)は栄養価の高い家畜の餌として貴重な資源となっている。しかし、長年の連作により土壌の劣化が進んできており、この対策も政府の重要課題とされている。

ところで、カオラックは日本人仲間ではもう一つの言われ方で有名である。それは「ごみだめの町」である。カオラックは交通の要衝にあり、多くのトラックやバス・タクシーが行き来する中、なぜか町のあちこちにゴミが積まれている。ここをよく知る日本人に聞くと、これでもまだましになったとの話である。現地に入った当時は雨期だった。カオラック周辺の Saloum 川の水はゴミと生活排水で黒くよどみ、時には異臭を発する。また町のあちこちでできる水たまりも黒く濁り、外出するときは避けながら歩かなければならない。乾期になるとこんどは粉末化したゴミが大気中に飛散し、ちょっとマスクがほしくなることも多い。このような時は、あまり町にも出歩きたくなくなる。

さて、25年ぶりのセネガルであったが、カオラックの町には現在も多くのロバや馬の馬車がタクシー代わり

に利用されている。もちろん車やバイクのタクシーも多く走っている。野菜市場ではのんびりと野菜の値段交渉をした買い物客が、帰りにはこれらタクシーを利用して帰宅していく。また、道路はあちこちで舗装がはがれている。このような光景を見ると、「あれっ、25年前とあんまり変わらないなあ」という感覚になる。

我々の仕事の中では、PC利用があたりまえとなり、通信も FAX/手紙から、e-mail に大きく変化していく中、カオラックの町の生活のテンポはゆっくりと動いているように感じられた。この差が結局は、時代に乗ったものと乗り遅れたものとの差なのかもしれない。我々は世界のどこにいても、毎日当たり前のようメールチェック行わなければならない。また、それへの対応のため、地球上のどこにいても、会社や他のプロジェクトの業務に追まわられている。仕方ないとは言え、顔も見合わさない中で進んでいく業務とはうらはらに、現地ではお茶の一杯で始まる農民との会話のギャップの大きさを、このセネガルで感じてしまった。

(2011年12月 財津)



飼料としての落花生残渣を山積みして走るトラック



落花生の風選風景